



常連客と酒を酌み交わす
筆者(左端) ≈ 独ラインラント・プファルツ州
ラント・プファルツ州

長崎 多文化 環球通信

長崎大多文化社会学部の学生に留学先での体験をリポートしてもらう「環球通信」の3回目。今回はドイツのマンハイムから、学生ならではのむちやな試みや、本場のあの飲み物の味を報告してもらいます。

自転車の旅断念 田舎町の酒場へ

@独マンハイム大

上通りかかった小さな町 ≈ 独ラインラント・プファルツ州
下自転車で走った田園 ≈ 独マンハイム



道に迷い、2時間ペナルをこいだ。人影はなく、鹿を時折見かける程度。誤って高速道路「アウトバーン」にも入り込んだ。トラックやバスが横を駆け抜け、肝を冷やした。予定の半分も進まず、ドイツ一周は一日で断念した。

その晩、ガイドブックにも載

「また飲みに来い」会計ツケに



つていよいよ田舎町で安宿に泊まつた。あてもなく町をぶらついでいると、酒場の中から窓越しに手を振る男性がいた。私は、その店を訪ねることにした。男性はすいぶんと酒を飲んだ。様子ながら、席に案内してくれた。「ビールでいいよな」と聞いたかと思えば、私の同意を得たずに2杯注文。キンキンに冷えたドイツビールは、疲労感もあいまって人生で一番おいしく感じた。

男性に「乾杯」の日本語を教えると、「干杯」の方言の『Kōmm bei』(コムバイ) ≈ こつちに來い』みたいだと気に入り、何度も私に「コムバイ」をせがんだ。

小さな町の、小さな酒場。落

ち着いた雰囲気の店内の小さなテレビではサッカー中継が流れている。ほとんどが常連客で、新たに客が入ってくるたび、この男性は席を立ち、私の横に連れてくる。気がつけば満席になりました。閉店までお酒を楽しんだ。

帰り際、会計をしようとする

と、店主も周りの客もびた一文受け取ってくれない。理由を聞くと、みな口をそろえた。「ツケ」といてもらえ。そしてまた飲みに来い。俺たちは毎日ここで飲んでるから」

まもなく私の学生生活は終わる。その後の生活がどれだけ忙しくなっても、必ずもう一度あの店を訪ねるだろう。ツケられっぱなしでは、いられないからだ。

(4年・榎本力良)

3月末のドイツ・マンハイム。三寒四温という言葉は、この町には当てはまらないよう思ふ。強いて言えば「七寒七温」。身を切るような氷点下の曇天が、次の週には肌を焼くような晴天へと姿を変える。中古の自転車にまたがつて、春休みにドイツ一周を試みた。田園風景が広がるなか、すぐに